

遊びを通した子ども理解に関する一考察 —領域「人間関係」と幼児期の終わりまでに育って欲しい姿 「協同性」に着目して—

A study of Understanding Children through Play
— Focus on “cooperativity” that you want to grow up
by the end of early childhood and “human relations” —

明 石 英 子
Fusako AKASHI

要旨

乳幼児期の教育は、遊びを通した総合的な指導のもとに営まれるものであり、子どもは日々の遊びのなかで、多様な人と関わりながら様々な力を培っている。現行の幼稚園教育要領は、社会の状況を踏まえながら時代ごとに求められる教育を踏まえて改訂がなされてきた。文部科学省（2005）は都市化や情報化の進展等により、人間関係が希薄になってきたとしており、そのような社会状況においては人間関係に注視する必要がある。また、乳幼児期は直接的な体験が重要であり、保育者が子どもの遊びをどう見て関わるかを考える必要がある。そこで本研究では、子どもの遊びをどう見て子ども理解をしていくか、まず人と関わる力の育ちに関する領域「人間関係」の変遷を紐解きながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の中でも領域「人間関係」に関連する「協同性」が示している内容に着目し、実際の子どもの遊び事例をもとに検討した。その結果、領域「人間関係」の内容は、社会状況の変化に応じて、子どもが主体的に多様な人と関わることを重視しており、また、遊びの中で子どもは「協同性」が示す内容を経験していることが見えてきた。保育者は子どもが人との直接的な関わりをもつ経験を積み重ねるなかで、集団のなかでも個々が自己発揮できるようにし、遊びの過程を丁寧に見取り関わること、そして子どもの内面に目を向けて育ちを見る力が求められることが示された。しかし、今後遊びを通した子ども理解のための事例を用いた読み取りについては、その方法を検討していく必要がある。

キーワード 子ども理解 人間関係 協同性

I. はじめに

(1) 子どもを取り巻く環境と人間関係

乳幼児期は人間発達の原点であり、人は家庭を中心として、生まれたときから生活や遊びの中で様々な人と関わりながら育っていく。人は、人との間で生きていく存在であり、人と関わる力は発達の基盤となろう。人格形成の基礎を培う幼児期の遊びの中では、互いの主張が行き違ったり、ぶつかり合うなどの葛藤を味わうことも多い。しかし子どもは、そのような経験を経て、自分とは違う考えに出会い新たな発見をしたり、自己の思いを調整しながら、人と関わる力を身につけていくのである。幼児教育は教科教育ではなく、5領域を通して総合的に営まれており、領域「人間関係」は、発達において人と関わる力を育むための視点である。

しかし現代社会は都市化・核家族化などに加え、グローバル化や情報通信技術の進展が著しく、コミュニケーションの形も大きく変化してきた。文部科学省（2005）は、都市化や情報化の進展や自然遊びなどの空間が減少した反面、テレビゲームやインターネット等の室内遊びの増加など偏った体験を余儀なくされているとしており、それに加えて、人間関係が希薄化し地域の教育力が低下していると述べている¹⁾。そのような社会状況にあることを踏まえて、岩立ら（2020）は、人と関わる力は発達の基盤であるとし、集団生活において能動的に周囲の子どもや大人と関わるなかで、思いを伝え合うことや自己調整する力が発達していくとしている²⁾。つまり、現在のような社会状況の中で、子どもにとって集団生活の場である保育現場の役割は重要であり、人との関わりの中で多様な経験をすることが期待されるのである。

(2) 遊びを通した子ども理解

現在、人と人が一緒に過ごし関わりを持つ時間や空間が少なくなっている反面、オンラインでのコミュニケーション場面が増えるなど、近年は直接的な関わりだけでなく、多様な場面で人とつながる力が求められているように感じる。このような時代だからこそ、幼児期の遊びなど直接的な体験の中で保育者が子どもの思いを丁寧に汲み取り、理解しようとするのが重要な意味をもつと考える。

民秋（2017）は、「幼児教育の特質から、幼児教育において育みたい資質・能力は、個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、一体的に育てていくことが重要である」と述べている³⁾。乳幼児期の子どもの遊びにはすべてが詰め込まれており、重要な位置づけであると共に、幼児の自発的な遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習として位置づけられている。また、大豆生田ら（2019）は、保育場面での遊びについて「学級や学年、園全体などの集団生活のなかで、保育者や友達など固定的、継続的な人との関わりがあるなかでの遊びであること」、「保育者という専門家によって、発達にふさわしい遊具や用具等の環境が整えられているなかでの遊びであること」と述べている⁴⁾。つまり、幼児教育に携わる保育者は、子どもの遊びを専門的視点で見ながら環境を整え関わる事が求められていると言える。遊びをただ漠然と見ているだけでは何も読み取ることはできない。保育者が保育観や子ども観をもって、5領域や2018（平成30）年の改訂で示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」という視点を通して子どもを観察する必要がある。

小川（2015）は、「幼児の各々の遊びを豊かにする援助をするには、それぞれの場で遊んでいる状況に合わせて幼児の理解を確立しなければならない」とし、「幼児理解はいつも幼児たちとの関係の中で『見る⇔見られる』というつながりで幼児を理解するということである」と述べている⁵⁾。つまり、保育者が自発的に遊ぶ子どもと関わり、遊びの過程を通して子どもを理解しようとするのが重要であると言える。

子どもは乳幼児期の遊びの中で様々な人と関わる経験をしますが、その人の中には保育者も含まれている。子どもは信頼関係を基盤とした保育者との関係性の中で安定し、自己発揮しながら過ごすことができると考える。子どもと関わる保育者は遊びの当事者でありながら、俯瞰的にその遊びの全体像や子どもの姿を見ることが求められ、遊びの中の人との関わりを通して、

多様に直接的な体験をする子どもたちを見守り、育ちを支えていく必要があると考える。

そこで本研究では、まず領域「人間関係」に着目し、その変遷を紐解きながら、子ども同士の関わりに焦点をあてるために、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の中の領域「人間関係」に関わる「協同性」を取り上げ、その関連を考察する。さらに、実際の子どもの遊びの事例を通して、「協同性」の視点からの遊びを通した子ども理解について検討するものである。

Ⅱ. 領域「人間関係」の変遷と幼児期の終わりまでに育って欲しい姿「協同性」との関連

(1) 領域「人間関係」の変遷

幼児教育のねらいや内容を示す要領・指針は、社会状況を踏まえながら、時代ごとに変遷されてきたが、現在の領域「人間関係」はいつから示されているのだろうか。幼稚園教育要領の変遷を振り返ると、まず1948（昭和23）年に文部省が示した保育要領では、「幼児の保育内容—楽しい幼児の経験—」として「見学」「リズム」「休息」「自由遊び」「音楽」「お話」「絵画」「制作」「自然観察」「ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」「健康保育」「年中行事」が挙げられている。その後、1956（昭和31）年に作成された幼稚園教育要領では、保育要領の全面改訂が行われ、幼児期に望ましい経験が、「健康」、「社会」、「自然」、「言語」、「音楽リズム」、「絵画制作」の6つの領域に整理され、小学校以上の教科教育との違いを明示した。この1956（昭和31）年に「領域」という言葉が初めて出現している。しかし、この頃にはまだ「人間関係」という領域は示されておらず、現在の「人間関係」にあたる内容は、「社会」という項目のなかに見られる。つまり、後に領域「人間関係」の元となるものであると考える。

1964（昭和39）年の改訂では、幼稚園教育の独自性が明確化され、幼稚園修了までに達成することを「望ましいねらい」として示された。このときも、「人間関係」という文言は出てきておらず、「社会」の中に人との関わりに該当する内容が含まれて簡潔に記され、留意点が示されている（表1）。この1964（昭和39）年の幼稚園教育要領で示された保育内容は、幼稚園教育の目的を達成するための手段であり、教師の側からの指示によって知識・技能・態度を習得させる教育の展開がされており、教師主導により保育がなされていた⁶⁾。この1964（昭和39）年を最後に、1989（平成元）年まで幼稚園教育要領は改訂されないまま保育現場で受け継がれていった。

表1 幼稚園教育要領 1964（昭和39）年告示 第2章 内容 社会

- | |
|---|
| <p>1 個人生活における望ましい習慣や態度を身につける。</p> <p>(1) 自分でできることは自分でする。</p> <p>(2) 明るくのびのびと行動する。</p> <p>(3) 物をたいせつにする。</p> <p>(4) 規律のある生活をする。</p> <p>(5) 自分の思つたことをすなおに正直にいう。</p> <p>(6) 遊びや仕事を熱心にし、最後までやりとおす。</p> <p>(7) よい悪いの区別ができるようになり、考えて行動する。</p> |
|---|

- 2 社会生活における望ましい習慣や態度を身につける。
 - (1) 喜んで登園し、先生に親しみ、幼稚園の生活に慣れる。
 - (2) 友だちと仲よく遊んだり仕事をしたりする。
 - (3) 父母や先生などに言われたことをすなおにきく。
 - (4) 人に親切にし、親切にされたら礼をいう。
 - (5) 人に迷惑をかけたらすなおにあやまり、人のあやまちを許すことができる。
 - (6) 友だちの喜びをいっしょに喜ぶことができる。
 - (7) 先生や友だちと約束したことを守る。
 - (8) 自分の物と人の物の区別ができる。
 - (9) 共同の遊具や用具をたいせつにし、ゆずりあって使う。
 - (10) 遊びのきまりを守る。
 - (11) グループを作って遊びや仕事をする。
 - (12) 学級やグループの中で役割を受け持って仕事をする事ができる。
 - (13) 身近な公共物をたいせつにする。
- 3 身近な社会の事象に興味や関心をもつ。
 - (1) 幼稚園や家庭ではみんなが助けあっていることを知り、親しみをもつ。
 - (2) 幼稚園、家庭、近隣などには自分たちのために働いている人がいることを知り、親しみをもつ。
 - (3) 自分たちの生活と特に関係の深いいろいろな公共施設や交通機関などに興味や関心をもつ。
 - (4) いろいろな人が、いろいろな場所で働いて、人々のために物をつくっていることに気づく。
 - (5) 身近な世の中のできごとに興味や関心をもつ。
 - (6) 幼稚園の行事に喜んで参加する。
 - (7) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

その後、家庭環境や社会環境の変化に伴い、1989（平成元）年に全面改訂が行われた。1989（平成元）年の改訂では、幼稚園教育の基本として「幼稚園教育は環境を通して行うものである」とし、幼稚園生活の全体をとってねらいが総合的に達成されるよう、具体的な教育目標を示す「ねらい」とそれを達成するための教師が指導する「内容」を区別し、その関係を明確化した。民秋（2017）は、6領域は小学校の教科に準じており、まぎらわしいなどの誤解や批判に対応するものとして、新たに再編成し、5領域として整理されたと述べている⁷⁾。文部科学省（1989）は「幼稚園教育指導書 増補版」の中で、改訂について「社会の変化とそれに伴う幼児の生活や意識の変化に配慮しつつ、生涯学習の基盤を培うという観点に立ち、来たるべき21世紀に向かって、社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ることを目指して行ったものである」と説明している⁸⁾。この改訂から領域「人間関係」が示されるようになった。横山（2008）は、領域「社会」から領域「人間関係」への変更について、少子化や都市化の進行により、集団でかかわる場と人の喪失した結果、人間関係の希薄となったことを背景として、「社会」の項目の中から、「人間関係」に関わる部分を焦点化したものであると述べている⁹⁾。また、水原（2016）は、昭和39年の要領の領域「社会」と比べ、「自己を肯定し充実させ自立への基礎を培う性格の強いものとなっている」と述べており¹⁰⁾、教師主導から子ども自身の学

び取る力を伸ばす方向へ転換していることが窺える。

この大幅な改訂の後、1998（平成10）年、2008（平成20）年、2018（平成30）年と社会環境を踏まえながら時代に応じた改訂がなされてきた。以下の表は、1989（平成元）年から2018（平成30）年までの領域「人間関係」のねらいと内容の改訂部分に下線を引いてまとめたものである（表2）。

表2 幼稚園教育要領 1989（平成元）年から2018（平成30）年までの改訂

1989（平成元）年	1998（平成10）年	2008（平成20）年	2018（平成30）年
1 ねらい	1 ねらい	1 ねらい	1 ねらい
(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。	(1) 幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。
(2) 進んで身近な人とかかわり、愛情や信頼感をもつ。	(2) 進んで身近な人とかかわり、愛情や信頼感をもつ。	(2) 身近な人と親しみ、かかわりを <u>深め</u> 、愛情や信頼感をもつ。	(2) 身近な人と親しみ、関わりを <u>深め</u> 、 <u>工夫したり</u> 、 <u>協力したりして一緒に活動する楽しさ</u> を味わい、愛情や信頼感をもつ。
(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。	(3) 社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。
2 内容	2 内容	2 内容	2 内容
(1) 喜んで登園し、先生や友達に親しむ。	(1) <u>先生や友達と共に過ごすことの喜び</u> を味わう。	(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。	(1) 先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう。
(2) 自分で考え、自分で行動する。	(2) 自分で考え、自分で行動する。	(2) 自分で考え、自分で行動する。	(2) 自分で考え、自分で行動する。
(3) 自分でできることは自分です。	(3) 自分でできることは自分です。	(3) 自分でできることは自分です。	(3) 自分でできることは自分です。
(4) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。	(4) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。	(4) <u>いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり逃げようと</u> する気持ちをもつ。	(4) <u>いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり逃げようと</u> する気持ちをもつ。
(5) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。	(5) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。	(5) 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。	(5) 友達と積極的に <u>関わりながら</u> 喜びや悲しみを共感し合う。
(6) 友達と一緒に遊びや仕事を進める楽しさを知る。	(6) 友達のよさに <u>気付き</u> 、 <u>一緒に活動する楽しさ</u> を味わう。	(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。	(6) 自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
(7) 友達とのかかわりの中で言うてはいけないことややしてはいけないことがあることに気付く。	(7) 友達と一緒に物事をやり <u>逃げようと</u> する気持ちをもつ。	(7) 友達のよさに <u>気付き</u> 、一緒に活動する楽しさを味わう。	(7) 友達のよさに <u>気付き</u> 、一緒に活動する楽しさを味わう。
(8) 友達と楽しく生活する中でできまりの大切さに気付く。	(8) <u>よいことや悪いことがあることに気付き</u> 、 <u>考えながら行動する</u> 。	(8) 友達と楽しく活動する中で、 <u>共通の目的を見だし</u> 、 <u>工夫したり</u> 、 <u>協力したり</u> などする。	(8) 友達と楽しく活動する中で、 <u>共通の目的を見だし</u> 、 <u>工夫したり</u> 、 <u>協力したり</u> などする。
(9) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。	(9) 友達とのかかわりを <u>深め</u> 、 <u>思いやり</u> をもつ。	(9) よいことや悪いことがあることに <u>気付き</u> 、 <u>考えながら</u> 行動する。	(9) よいことや悪いことがあることに <u>気付き</u> 、 <u>考えながら</u> 行動する。
(10) 自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。	(10) 友達と楽しく生活する中で <u>できまりの大切さに気付き</u> 、 <u>守ろうとする</u> 。	(10) 友達とのかかわりを <u>深め</u> 、 <u>思いやり</u> をもつ。	(10) 友達との <u>関わり</u> を <u>深め</u> 、 <u>思いやり</u> をもつ。

	(1) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。 (2) 高齢者をはじめ地域の人々など自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。	(1) 友達と楽しく生活する中でできまりの大切さに気づき、守ろうとする。 (2) 共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。 (3) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。	(1) 友達と楽しく生活する中でできまりの大切さに気づき、守ろうとする。 (2) 共同の遊具や用具を大切にし、皆で使う。 (3) 高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ。
--	--	---	---

1998（平成10）年の改訂では、他者との関わりに関する内容が細分化され、地域の人々との関わりが新たに加えられた。これは、社会環境の変化に伴い、地域力の低下が見られるようになったためと考えられる。また、「よいこと」「悪いこと」の善悪の区別について明示し、他者との関わりの中で思いを共有したり、考えの違いに気付いたりしながら、一緒に活動することの楽しさを味わうことを示している。つまり、他者との協同の中で、自己を発揮しながらも、相手の思いに気づきお互い育ち合える環境がさらに求められるようになってきたと考える。

この善悪の区別に関して、1989（平成元）年では「友達とのかかわりの中で言うてはいけないうことやしてはいけないうことがあることに気付く」と示されている。改めて、1964（昭和39）年の内容「社会」を見てみると、「よい悪いの区別ができるようになり、考えて行動する」と、1998（平成10）年の「良いことや悪いことがあることに気づき、考えて行動する」と似たような文言が示されている。その他にも「友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ」「友達と楽しく生活する中でできまりの大切さに気づき、守ろうとする」など道徳性に関する項目が多く見られる。人との関わりにおいて、善悪の区別を含めた道徳性は重要となろう。1964（昭和39）年では、「区別できるようになり」としているが、この頃の幼児教育が教師主導であったことを踏まえると、1998（平成10）年では「気づき、考えて行動する」とあるように、子どもが生活や遊びの中で気付くことを大切にしており、子どもの主体性を重視していることが窺える。

文部科学省（1997）は「時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について—最終報告—」で、家庭環境の変化や情報化している現状に触れ、幼児の発達にとって最も重要な自我を形成する機会が減少していると述べている。それを踏まえて、幼児教育では、ものや人とのかかわりにおける自己表出を通して自我を形成するとともに、自分を取り巻く社会への感覚を養うことなどが幼稚園教育の広い意味での役割であると述べている¹¹⁾。つまり、子どもが多様な関わりの中で自己コントロールをしながら様々な力を養っていくことを大切に、保育者は幼児に指示するのではなく、幼児が自ら考えられるよう援助することが求められたのである。

2008（平成20）年度の改訂では、さらに「共通の目的」という言葉が用いられ、協同に関わる文言が加えられている。無藤（2019）は、2008（平成20）年の改訂の要点として以下の3つをあげている。

- 幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる経験をし、自信をもって行動できる

ようにすること

- 協同して遊ぶようになるため、自ら行動する力を育てるとともに、他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること
- 互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること

そのうえで、社会情動的スキルと「人間関係」を関連づけながら2点目に協同性が書かれているとし、協同とは「友だちと力を合わせて一つの目的に向かって取り組むこと」をさしているとしている。また、OECDは「それぞれの人のもつ力やよさを生かしながら目的を共有して働くことをさす概念」としての「協働」という言葉を用いているとし、「協働の前段階の発達として協同があるととらえることができる」と述べている¹²⁾。将来につながる長期的な育ちを考えたとき、現代社会のなかで「協同性」がどう育まれていくのか、個の姿もさることながら、集団のなかの個の姿、また集団の姿など、人との関わりのなかの子どもを理解する視点が重要なのではないかと考える。

2018（平成30）年の改訂では「みんな」が「皆」に変更されたこと以外は、大きな変更はなかった。ただ、表2には示していないが、最新の2018（平成30）年の「内容の取り扱い」を取り上げると、改訂された部分として「(1)教師との信頼関係に支えられて自分自身の生活を確立していくことが人と関わる基盤となることを考慮し、幼児が自ら周囲に働き掛けることにより多様な感情を体験し、試行錯誤しながら諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通しをもって自分の力でやることの充実感を味わうことができるよう、幼児の行動を見守りながら適切な援助を行うようにすること。」と、「(2)一人一人を生かした集団を形成しながら人と関わる力を育てていくようにすること。その際、集団の生活の中で、幼児が自己を発揮し、教師や他の幼児に認められる体験をし、自分のよさや特徴に気付き、自信をもって行動できるようにすること。」の文章内の下線部があげられる¹³⁾。

内容の取り扱い(1)の「諦めずにやり遂げることの達成感や、前向きな見通し」をもつことは、遊びの中でも見られる大切な育ちであろう。見通しをもつためには、例えば遊びのなかで試行錯誤している場合、自分の動きに対して結果がどうなるのかなどを考えるための想像力が必要である。その想像力は、個々の遊びでも培われるが、集団のなかで他者と関わることで、さらに広がりをもつことができると考える。

また、幼児が他者と関わる際には、保育者の丁寧な見取りと関わりのもとで、「人間関係」の内容の取り扱い(2)の「自分の良さや特徴」に気付くことができよう。さらに、自分と向き合うためには、客観的に自分を見る必要があり、それは他者と関わることで気づきが得られるものであると言える。人格形成の基礎を培う乳幼児期に、他者と関わりながら、領域「人間関係」に示されているようなねらいをもち、内容を丁寧に保育に取り入れていくことで、これからの時代を生きる子どもたちに必要な力が育まれていくと考える。

(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿「協同性」と「人間関係」の関連

2018（平成30）年の幼稚園教育要領の改訂で、小学校とのつながりをより円滑にするために、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」10項目が示された。この10項目は、日々の保育や子どもの育ちを振り返り評価するための指標でもある。そして、今まで大切にしてきた5領域の特に内容の取り扱いの中から大切にしていかなければならないものを再整理し、抽出されたものであり、子どもの育ちの方向性を示したものである。これからの保育においては、子どもの姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と照らし合わせながら、乳幼児期にふさわしい経験ができていくかを確認することも必要であろう。

この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と5領域には関連があり、「健康」は「健康な心と体」、「人間関係」は「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識」「社会生活とのかかわり」、「環境」は「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量・図形・文字への関心・感覚」、「言葉」は「言葉による伝え合い」、「表現」は「豊かな感性と表現」とされている¹⁴⁾。領域「人間関係」は5領域の中でも、関わりの深い項目が多いことが窺える。

変遷をおっていくと、「人間関係」という領域の性質上、人との関わりに重点を置いた内容であり、「友達と」「一緒に」という文言が改訂ごとに多く見られる。昨今、SNSなどインターネット上の交流が増加し、乳幼児の日常生活の中にも当たり前のように存在している。直接的な人との関わりが減少し、バーチャルな世界での関わりが増加している傾向がある。ベネッセの2013年と2017年の調査で、スマートフォンやタブレットの使用について、0歳～2歳の伸び幅が大きく、2013年の調査では2歳以降で6割以上が触れていたが、2017年では8割以上が触れているという結果が示された¹⁵⁾。スマートフォンやタブレットは現代社会では子どもにとって身近なものとなっている。人は人と関わる中で育つものであるが、直接的な触れ合いや関わりの方が減少することで、子どもの育ちにも影響が出ることが予想されよう。生きていく上で、社会的スキルは重要であるが、そうした力も人との関わりの中で育まれると考える。

無藤（2013）は、「協同のあり方というのが、幼児教育の特に人間関係にかかわるところで、おそらく教育としての中心的な理念だろう」と述べている¹⁶⁾。幼児教育の現場は、園の規模によってもその大きさに違いはあるものの、集団生活の場である。家族以外の他者と、生活や遊びを共にしながら、様々な思いを共有し、時には衝突を繰り返しながら共存していく。それは、社会生活への入り口であるとも言えよう。乳幼児期は人間発達の原点とも言える重要な時期だが、子どもの社会性の育ちも集団の中で多様に見られるのである。

次に、幼児期の終わりまでに育って欲しい姿の項目について考える。以下は、領域「人間関係」と関連があるとされる項目である（表3）。

岩立ら（2020）は、領域「人間関係」と関わりの深い4項目について、そこに示された姿が見られる根底には、基盤として子どもが身近な大人の愛情豊かな関わりがあり、そのうえで様々な経験を重ね、人と関わる力が育まれていくと述べている。また、保育現場は集団生活の場であり、保育者に見守られ、安定して過ごしながらか、友達と多様な関わりをしている¹⁷⁾。人と関わる子どもの姿を見る際、4項目の中の「協同性」は特に集団生活の中で育まれるものである

表3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の領域「人間関係」に関する項目

<p>(2) 自立心</p> <p>身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。</p>
<p>(3) 協同性</p> <p>友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。</p>
<p>(4) 道徳性・規範意識の芽生え</p> <p>友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。</p>
<p>(5) 社会生活との関わり</p> <p>家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。</p>

と考える。

無藤（2018）は、「協同性」について、5領域全てに関係しているとしながらも、特に「人間関係」に関わる子どもの育ちによる姿であるとしている¹⁸⁾。さらに「人間関係」について、『自立心』を基盤としつつ、子どもが人と関わる力を、とりわけ子ども同士が遊ぶ過程で培い、『道徳性・規範意識の芽生え』をもたらし、『社会生活との関わり』にもつながっていくこと¹⁹⁾が見て取れると述べ、協同性は「子どもの遊びが展開するプロセスに立ち現れること¹⁹⁾」になっている。幼稚園教育要領解説（2018）では、「協同性」の解説として「人間関係」だけではなく全体を通して育まれることに留意する必要があることを踏まえて、「協同性は、領域『人間関係』などで示されているように、教師との信頼関係を基盤に他の幼児との関わりを深め、思いを伝え合ったり試行錯誤したりしながら一緒に活動を展開する楽しさや、共通の目的が実現する喜びを味わう中で育まれていく」と示されている²⁰⁾。また、ただ一緒に活動すれば良いというのではなく、子ども同士が互いの良さに気付き、認め合えるような関係性ができてくるのが大切であると述べ、子どもと関わる保育者はそうした関係性が築けるよう、子どもの思いや考えを受け止めながらも子ども同士が共通の目的に向かう過程を丁寧につまみとることが求められるとしている²¹⁾。

無藤が述べているように「協同性」が教育の中心的理念であるとするれば、子どもの遊びを見る際、他者と関わる個々の子どもの姿に着目しながら、改めて集団としての子どもの育ちも読

み取る必要があると考える。そのことが幼稚園教育要領解説にあるように、「小学校以降でも教師や友達と協力して生活したり学び合ったりする姿」²²⁾につながっていくのである。

Ⅲ. 遊びの事例に見る子ども理解

幼児が自発的に展開する遊びのなかには、多様な子どもの姿が現れる。保育者は、その子どもの姿から様々な育ちを読み取りながら、目の前の子どもを理解し、よりよい保育を営んでいくのである。

ここでは、子どもの遊び事例を2つ挙げ、その遊びを、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「協同性」の視点から考察し、遊びのなかでの子ども理解について検討する。幼児期の終わりまでに育って欲しい姿について、無藤（2018）は、10の姿を細かく区切った後、それぞれに「～経験があるか」を付けて保育を振り返ることを提示している²³⁾。

そこで本研究では、2事例について、「協同性」の文章を文節で区切り「～経験があるか」を語尾につけて、「①友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有するような経験があるか」「②共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりするような経験があるか」「③充実感をもってやり遂げるような経験があるか」の3つの視点から事例を読み解き、考察する。なお、以下の事例は、筆者が関わった幼稚園の子どもの遊びである。

《事例1：しずくの不思議（5歳児 7月）》

7月上旬の雨天時、園庭で大きなビニール袋で作成した手作り合羽を着て「雨降りさんぽ」をした。園庭を歩いていたS男は、汽車の形をした遊具の屋根の角からしずくが落ちているのを立ち止まって見はじめた。そこへすぐに数人集まり、S男と一緒に落ちるしずくを見つめていた。するとS男が「なんで落ちてくるんやろう？」と疑問を投げかけた。それを聞いて周囲の子は「重たいからじゃない？」「え、水やから軽いよ」「雨だからじゃない？」「これ雨なの？」など話し始める。そんな中、S男が「先生！見て！ここ水繋がってる！」と屋根を指さした。見ると、汽車の屋根沿いを水が伝い、それが屋根の角に集まってしずくとなって落ちていた。「わぁ！集まってるね！」と保育者が言うと、S男が「わかった！水がいっぱいここに溜まったら落ちるんや！」と言った。周囲の子どもたちも「あ、本当や！見て、大きいもん！」としずくを指さして言った。

そのうち、見ていたしずくが濁りはじめた。「あれ、汚くなってきた。なんでやろ」とS男は、再び注意深くしずくを見て言った。子どもたちもS男の言葉を聞いて遊具のあちこちを見始めた。しばらくすると、S男が「先生！ここ土ついてる！雨の水と混ざってる！」と屋根の角の少し手前に土がついている箇所を見つけ、指をさしながら大きな声で言った。周囲の子もそこへ集まり「本当や！混ざってたんや！」「泥水になった！」と言いながら茶色く濁ったしずくを興味深く見ていた。

考察

この事例の子どもの姿について、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「協同性」の視点から考察する。

①友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有するような経験があるか

S男が投げかけた「なんで落ちてくるんやろう」という発言から、周囲の子たちが自分なりに考えを出して、交流している。また、「ここ水混ざっとる！」など一人の発見に、他の子どもも集まり「本当や！」とその発見を共有し、また、興味を深めていることから、互いの思いを共有する経験をしていると考える。

②共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりするような経験があるか

「共通の目的」はこの場合「なぜしずくは落ちるのか」「なぜしずくは濁ったのか」という疑問であろう。子どもは、この共通の疑問について、まずはしずくが落ちる現象を注意深く観察して解決しようとしている。そして「重たいからやない？」と重いものは上から下へ落ちることや、「雨だからじゃない？」と雨は空から地上へ降るという自分自身の今までの経験から考えたことを伝えている。このことから、ひとつの問題をみんなで解決しようと積極的に意見交換し協力する経験をしていると考える。

③充実感をもってやり遂げるような経験があるか

子どもは、なぜしずくが落ちてくるのかという疑問から、自分たちなりの解決を導き出すために、自分の経験や目の前の事象の観察から得た考えを交流している。その結果、「水がいっぱい溜まったら落ちる」というひとつの答えを導き出した。この事例では、子どもにとって、あるひとつの答えに行き着いたことの喜びを共有している姿が見られる。だからこそ、しずくの観察はその後も続けられたのであろう。つまり、しずくが落ちる仕組みを解明する過程も含めて充実感を味わい、ひとつの答えを導き出したことでやり遂げる経験ができていていると考える。

《事例2：「水が来ない！」（4歳児 6月）》

年中の子ども達中心に、砂場で川を作ろうと土を掘り進んでいたが、量も少なく思うように水が流れなかった。そこでS男が、ホースで砂場に水を流していた保育者Aに「水来んなあ。先生、こっちにも水ちょうだい！」と言い、保育者Aがホースを伸ばしたがS男の場所まで届かなかった。H子「ここまで届かん。」S男「どうしようかな。」保育者B「違うやり方考えてみる？」A子「バケツで運べばいいやん。」A子の提案に数名が同意するが、H子が「そんなんいっぱいは無理やん。見て。水をこうやって押せばいいんやて。そっち行くやろ。」と言い、ほうきで掃くようにスコップを動かして水を流して見せた。A子「来た！」保育者B「本当や！流れて来た！」しかしS男が水の様子を見て「でもだめや。全然来おへん。」と言った。H子「なんで？」保育者B「そうか。来るけど少ないんやね。」H子「そうかあ。」S男「そんなんやて。いいこと思いついた！もうちょっとこっち掘って長くするわ！」と言うと土を掘り始めた。S男が自分の前を少し掘ったところで水が勢いよく流れ始めた。S男「あ！いっぱい来た！」周囲の子たちも「流れた！」等口々に言い喜ぶ。H子「本当や！」保育者B「すごいね！どうやったの？」S男（実演しながら）「こうやって掘ったら水がドーって流

れたんやて！ほら見て！」保育者 B「掘ったら流れたの！大発見やね！」H子「こうやって押すと、もっとそっち行くよ！」S男&保育者 B「来た来た！」H子「さっきよりいっぱい行った！」S男「もっと掘ってみる！」その後、H子を真似て A子がスコップで水を押ししたり、S男と一緒に遊んでいた子達も土を掘ると水が流れるということを、周囲の子達に伝えはじめた。

S男は、友達が川を作る為の水路を掘っていたが水が止まっていたのを見て、土があまり掘れていないことに気づき「それじゃいかん。水来んよ！こっちもっと掘らんと！」と言って、実際土を掘って見せた。S男が掘ると止まっていた水がすぐ流れて来て子ども達から歓声があがった。S男は得意げに「こうやってこっち深くしないといかんのやて！」と言いながら、友達と共に川作りを続けた。S男の話聞いた子ども達も S男のように土を掘り進め、水がうまく流れない時には土を深く掘り、スムーズに水が流れるようになった。

考察

この事例の子どもの姿について、幼児期の終わりまでに育ててほしい姿の「協同性」の視点から考察する。

①友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有するような経験があるか

この事例では、砂場で川作りを楽しみながら、子ども達は「水の流れ方」に興味を示し「水の流れをよくすること」を共通の目的として、S男、H子、A子が中心となり試行錯誤した。水が思うように流れた時には「流れて来た！」と、喜びを表現している。子ども達は互いに案を出し合って遊ぶ中で様々な気づきをし、水がよりよく流れる方法を発見することが出来た。また、保育者も共に喜び、思いを共感できたことで、各々自分たちの新しい発見に対して自信が深まり、それを他の子ども達に伝えようとする姿が現れていることから、思いや考えを共有する経験をしていると考える。

②共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりするような経験があるか

子ども達は、川作りで「水の流れ方」に特に着目し、水が勢いよく流れる為にはどうしたら良いかという「共通の目的」をもって遊びはじめている。水が流れる為には地面にある程度の高低差が必要なのだが、子ども達は自分の経験から案を出し、また道具を使って水を押ししてみるなど、失敗と成功を繰り返しながら試行錯誤している。このことから、互いに協力して考え、工夫する経験をしていると考える。

③充実感をもってやり遂げるような経験があるか

この事例では、試行錯誤する中で S男が「掘ったら流れた！」という偶然的発見をしている。発見した瞬間「やった！流れた！」と喜びを表現し周囲の友達も喜んでいる様子が見られる。さらに「来た来た！いっぱい来た！」「もっと掘ってみる！」と活動を継続させている姿が見られることから、喜びと同時に自分たちの力で課題解決出来た達成感や充実感を味わう経験をしていると考える。

IV. おわりに

本研究で取り上げた2つの事例は、子どもの普通の遊びの中で見られた姿である。いずれの事例も、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の「協同性」の内容を用いて子どもがどのような思いをもち、どのような経験をしているのかを読み取ろうと試みた。今回、遊びの事例を用いて検討する中で、子どもが友達や保育者との遊びの過程で共通の目的を見出し、それを達成するために様々な考えや思いを共有しながら協同している姿が窺えた。事例をただ考察するのではなく、「協同性」の内容に示された視点をを用いることでより具体的に子どもを理解できる可能性が見えてきた。

小川（2015）は、援助行動と幼児理解は分かちがたいとして、砂場遊びを例に挙げ「保育者が砂場に近づきつつ、幼児に働きかける行為そのものの中に幼児理解が内在している」と述べている²⁴⁾。保育者の子どもへの関わりには意図がある。その意図の大元は子どもを理解することだと言えよう。保育者は、遊びの中での人間模様を見ながらも、他者との関わりで一人ひとりが自己発揮できているかなど、子どもの内面にまで目を向けて理解しようとする姿勢が求められると考える。

無藤（2018）は、遊びに関わる周囲の大人が、「子どもの気持ちや関心、不思議さといった心の動きを捉える視点」を持っているのか、「その感動をキャッチし付き合うことができるのか」が大切であると述べている²⁵⁾。2つの事例を見てみると、子ども達が様々な気づきや発見をしている。川づくりの砂遊びでは、どうすれば水が流れるか、道具の使い方を工夫し、結果を予想しながら遊んでいる。思うような状況になった時には歓声があがり、達成感を味わっていたことだろう。その場に一緒にいる保育者も「大発見やね！」と子どもの気づきを意味づけ、水が流れたときには子どもの達成感や喜びと一緒に感じている。保育者が遊びの過程の中で、子どもの発言や行動を丁寧を受け止め、思いを共有することで、子どもがさらに遊びに意欲をもち継続していくことにつながっていくと考える。

人との関わりについて、領域「人間関係」では、友達と共に様々な経験をすることで、互いの良さに気づき、育ち合う関係づくりを大切にしている。しかし、単に一緒に遊んでいれば良いということではなく、領域「人間関係」の内容に「自分の良さや特徴に気付く」とあるように、集団のなかにおいても自分の思いや考えを大切にしつつ、自分の得意なことを生かし、発揮していくことが重要であると考えられる。2事例共に子どもの姿から遊びの中で思いや考えを伝え合いながら、互いの良さにも気づいていたことだろう。

2020年は、新型コロナウイルス感染症対策として、乳幼児期から大学まであらゆる教育現場で、ソーシャルディスタンスを保つことや、リモートの活用などその教育内容を工夫することが求められてきた。しかし、乳幼児期は直接的な体験が重要であるとされている。無藤（2018）は、乳幼児期の教育を経験主義的なものであるとし、子どもは好奇心や探究心、憧れを起点として、感性や感覚を働かせ、リアリティのある経験を通じて学ぶ教育であると述べている²⁶⁾。だからこそ、子育て支援もさることながら、その教育の性質上、幼児教育は早い段階で再開されたと言えよう。大学生等は、リモートの授業でも対応できるが、その根底には、乳幼児期から培ってきた直接的な体験や人との関わりが基盤となっているだろう。その基盤作りとも言える乳幼

児期に遊びを通して様々な人と関わり、学ぶことがいかに重要であるかを考えさせられる。

小川（2015）は、「保育者の心は幼児たちの遊びと共にありつつ、保育者のまなざしは、その姿をたしかにとらえていること、そこに保育者の幼児理解の本質がある」と述べている²⁷⁾。本研究で取り上げた事例では、保育者が遊びの当事者でありながらも、子どもの気付きを意味づけたり、思いを共有するなどして、俯瞰的に遊びの過程を見守り、関わっている。その関わりが、子ども同士をつなぐことにもなると考える。

無藤（2019）は、子ども同士の関わりを経験することが大切であるとしつつ、「子ども一人ひとりの特性に応じて、それぞれが十分に遊び、お互いに影響を受けながら育つことができるよう環境を整え、それぞれに今必要な援助を行うことが重要」と述べている²⁸⁾。保育者は、保育現場が集団生活の場であることの意味を改めて考え、「協同性」のあり方に留意しながら、目に見える部分だけではなく、目に見えない部分にも着目して子ども理解に努める必要がある。これからの教育の形態は、インターネットの活用がますます進み、変わりつつあると予想される。だからこそ、人格形成の基盤となる乳幼児期の遊びの中で周囲の友達や保育者など、様々な人と関わり育ち合うような直接的な体験が重要となろう。保育者は、子どもの良さに気付き集団のなかにおいても生かすことができるよう、子どもの遊びの過程を丁寧に見取り、関わっていく必要があると考える。

また、今回遊びの実践事例として2事例あげ、幼児期の終わりまでに育って欲しい姿をもとにして乳幼児期の人との関わりをのなかでの子ども理解ができる可能性が見えてきた。しかし、視点にあてはめていく作業になってしまう危険性もあるため、今後は乳幼児期に求められる遊びを通した子ども理解のための事例を用いた読み取りについては、その方法を検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 2005 子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）第1章4節 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1420140.htm
- 2) 岩立京子 西坂小百合 2020 保育内容 人間関係 光生館 p4
- 3) 民秋言 2017 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立と変遷 萌文書林 p25
- 4) 大豆生田啓友 秋田喜代美 汐見稔幸 2019 保育者論 ミネルヴァ書房 p96
- 5) 小川博久 2015 遊び保育論 萌文書林 p252
- 6) 森元真喜子 川上道子 2008 保育内容に関する研究（1）——平成元年版幼稚園教育要領改訂に焦点を当てて—— 中国学園紀要 第7号 p110-111
- 7) 3) 同 p12
- 8) 文部科学省 1989 幼稚園教育指導書 増補版 フレーベル館 まえがき
- 9) 横山文樹 2008 幼稚園における子どもの「人のかかわり」に関する考察（1）——領域「人間関係」の意義と課題の追究—— 学苑 初等教育学科・子ども教育学科紀要 No. 812 p30
- 10) 水原克敏 2016 1989年以降の幼稚園教育課程の基準とモデル・カリキュラム 早稲田大学 教育・

総合科学学術院 学術研究（人文科学・社会科学編）第64号 p364-365

- 11) 文部科学省 1997 時代の変化に対応した今後の幼稚園教育の在り方について—最終報告— https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/004/toushin/971101.htm II 幼稚園教育の役割
- 12) 無藤隆 2019 社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」北大路書房 p23
- 13) 3) 同 p136
- 14) 3) 同 p112-115
- 15) 第2回乳幼児の親子のメディア活用調査 レポート 2018 <https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail.php?id=5268> ベネッセ総合教育研究所
- 16) 無藤隆 2013 幼児教育のデザイン 東京大学出版会 p174
- 17) 2) 同 p11
- 18) 無藤隆 2018 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿 東洋館出版 p42
- 19) 12) 同 p174
- 20) 文部科学省 2018 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 p58
- 21) 20) 同 p58-59
- 22) 20) 同 p59
- 23) 18) 同 p99
- 24) 小川博久 2010 保育援助論 萌文書林 p203
- 25) 18) 同 p93
- 26) 18) 同 p20
- 27) 5) 同 p256
- 28) 12) 同 p18

